

## 星薬大の教養教育の充実を願って（旧制高校挽歌）

著者	緒方 理彦
雑誌名	星薬科大学一般教育論集
号	9
ページ	vii-xii
発行年	1991
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1240/00000175/">http://id.nii.ac.jp/1240/00000175/</a>

## 星葉大の教養教育の充実を願つて（旧制高校挽歌）

緒 方 理 彦

はじめに一言釈明をさせていただく。この論集は本来、原著論文掲載のためのものであつて、個人の生活体験や所感を載せるためのものではない。しかし、このような雑文をあえて記したのは次の理由による。

先日、ある方から「旧制高校の教育は間違つていた。何故なら、戦争を阻止することは出来なかったではないか」の意見を頂いた。折りしも、この四月から本学のカリキュラムは全面的に変わる。改定に際し掲げた教育目標は「教養ある薬剤師の育成」である。この時機に、教養教育に徹した旧制高校生活を経験した者として、その一端を紹介しておくことも無意味ではないと考えたからである。

確かに、戦前、軍部を抑えることのできる力を持っている者がいたとすれば、それは、官界、財界の指導者であり、彼らの多くは旧制高校出身者であつた。にもかかわらず、彼らは何もしなかった、否、進んで戦争に協力したではないか云々。はじめに記したような批判を世間の一部から受けるのは、これがその理由であるらしい。しかし、ある社会現象についての説明があまりに明快、一面的である場合、その話の進め方にも結論にも私はどうも馴染めない。他の例を挙げるならば、エリートとは出世主義者のこと、二年前までであれば、社会主義国家は平和主義であるの類である。新聞論調等に見られるこの種の主張にどれだけ悩まされてきたことか。

それはさておき、中学校卒業（修了）後、高校、高専、大学予科と進路の分かれる戦前の複々線的な高等教育コースは戦後の教育の民主化、機会均等の精神からは否定されるべきものとなった。学制改革により旧制高校は廃止されたが、その教育理念は、「市民としての教養」を標榜する新制大学発足時の一般教育に受け継がれてゆくことになる。

恐縮であるが、以下は私自身のことである。昭和二十年、十八才のとき、私は成城高校理科（成城大学の前身）に合格した。旧制高校生のステイタス・シンボルである白線帽を被りたい欲求だけは人並み以上にもっていたので、合格したときの心境は、まさに太宰治の言葉「選ばれたる者の恍惚と不安、二つの心われにあり」であった。

入学は終戦直前の七月であったが、激化する空襲で交通機関は麻痺し、出席するためには学校から証明書をもらい、五反田から新宿までの切符がやっと買えた状況での入学式であった。来賓として、東大哲学科の I 教授が

「馬を池までつれてゆくことは出来るが、水を飲ませることはできない」

と話し、もう一人は

「下水路を作ること一つにしても、それだけを立派に作ろうとしか考えない者と、将来を考えて作る者がいる。君たちは後者になる教育を受けるのである」

の意味のことを話した。式が終わると、在校性が次から次と登壇し檄を飛ばした。曰く「脱皮しろ」、曰く「諸君は形而上かつ形而下的に成城を愛さなければならない」云々。

敗戦は誰の目にも明らかであり、大豆数十粒が昼飯という中での授業開始であったが、ドイツ語の H 先生の「君たちは先ず寮歌を歌うための *eins zwei drei* ! と *Ich liebe dich*. をおぼえればよい」という言葉さえ胸ときめかして聞く充実した日々であった。

その H 先生が南方から要務で帰国し明日また戦場に赴くという若い陸軍士官を伴って教室に現われた。「諸君たち高等

学校生徒は」とその青年士官は云った。その言葉を発する士官には、これが殺氣というものかと思わせる雰囲気があった。彼は、祖国の将来は高等学校生徒の双肩にかかっていると繰り返した。その異様なまでの気迫に押されて誰もが無言であった。なぜ黙っているのかと問う彼に、H先生は「夜は工場で働いて疲れているのだ」と弁明してくれたが、「おそろく再び生きて帰ることはあるまい。これは遺言なのだ」と誰もが感じていたからに違いない。私の耳には、「諸君たち高等学校生徒は」の言葉が、ずっと後まで聞こえ続けていた。

ある日、上級生が歓迎会を開いてくれた。自己紹介をする新入生の中に「座右の書はジッセルの断想」というのがいたり、愛読書に聞いたことのない外国の小説をあげるのがいたりした。私は小学校の入学が一年おくれ、しかも中学を終えてからの入学であるが、彼らは、いわゆる四修と呼ばれる四年修了で進学してきた連中であつたので、私よりも確実に二つは若かつた。その彼等の読書の対象は、いかにも当時の高校生らしい背伸びをしたものであつたのであるが、そのときの私は、ただただ自分の幼さを恥じ入るばかりであつた。その席で、理科の人間でも必読の書として紹介されたのは、和書では出隆「哲学以前」、西田幾太郎「善の研究」、和辻哲郎「風土」、倉田百三「出家とその弟子」の類であつたと思う。私は、早速に「哲学以前」を手にしてみたが、「何と何か」ではじまるその文章に数ページでつまずき、以来哲学には無縁の人間となつてしまつた。

私は、寮生活をするこゝになつた。完全な自治寮で、私の入る棟は星友寮と呼ばれていた。ニーチェに「心の星を友にして」と云うのがあり、それが命名の由来とこのであつた。

空き地に芋を作り、食糧委員は食糧確保に奔走したが万策つきて長期にわたり休校ということもあつた。しかし、寮生活こそ旧制高校の真髄であるという自負と、誰にも拘束されない自由な時間と空間を維持したい気持ちとが皆を支えたのだと思う。そのことで退寮してゆく者はいなかつた。

一室に五、六名で、授業から帰ると翌朝までは全くの自由である。自習時間は定められていたが、何をしてもよかった。いちばん盛んであったのは、夜おそくまでの議論であった。文学を語り、社会を論じ、それは、あきることなく毎晩繰り返された。

寮は当然のことではあるが、女人禁制である。しかも、全国から集まってきた人間の共同生活である。自己主張の強い年代であるから、葛藤もあったが、知識だけからでは絶対に学びとれない様々の能力がそこで培われた。

もっとも、成城では自由を尊ぶ精神に加えて、洗練された文化を愛する気風が強かったので、雰囲気には、弊衣破帽、寮生活に象徴される官立旧制高校的なものとは幾分異なるものがあつたのではあるが。

授業を、私はよくさぼつた。ある日、哲学のF先生の授業に出てみて、身の引き締まる思いがした。明晰で、しかも迫力のある講義であつたからである。なんで私はこんな素晴らしい講義を聴かなかつたのかと悔やんだ。しかし、私はおろかであつた。次回からまたさぼってしまったのである。F先生に再会したのはそれから三十年後、文部省の視学委員として本学に来られたときであつた。先生は、ある国立大学の学長を経て、他の要職についておられたが、次の意味のことを云われた。「成城での教育は私の青春のすべてでした」

一口に旧制高校といつても全国に四十校以上あり、その殆どが官公立であつた。したがって、生徒個々の考え方はどうであれ、客観的には国家有用の人材を養成するところであつた。しかし、それだからといって、その教育内容は、直ちに国家・社会の要請に結びつくものではなく、徹底して「人間としての教養」を目標としていた。まして「専門科目との有機的関連付け」など、教師も生徒も全く考えないでよかつた時代であつた。教育内容は、たとえ理科生であっても、哲学、社会学など今でいう人文・社会科学系の科目が必修として課せられていた。しかも、教育の成果を挙げるに相応しい諸条件が備わっていた。すなわち、優秀で熱心な教授陣、少人数編成のクラス、そして、なによりも生徒に「選ばれた者」と

しての自負があつた。それら恵まれた環境にありながら、為すべきことを為さず可惜空費した日々を振り返ると、我ながら痛恨の思いに駆られる。

昔を懐かしむあまり、自分のことを語り過ぎてしまったが、以上が、ささやかな体験を通して紹介した旧制高校の姿である。

昭和二十四年に発足した新制大学には米国のカレッジの性格が持ち込まれた。すなわち、学部教育全体を市民としての教養教育の場とみなし、高度の専門教育は大学院でというのが、旧制大学との大きな違いと、当時われわれは聞かされたものである。

確かにカリキュラム面でも組織面でも一般教育がきわめて重要視された。その背景の一つには、旧制高校的教養に対する積極的評価があつたからだという。当時の国立大学の教養部教官の多くが旧制高校の元教官であつたから、その教養主義的な教育原理はそのまま生かされていたに違いない。

本学においても、薬専から薬大に移行したとき、前者が職能教育を主としたのに対して、後者は技術者として育てると同時に、薬学と人との関わりについて、また他の文化との関わりについて関心と理解を持たせること——これが市民的教養の一つである——を教育の目標にしてきた筈である。大学が旧専門学校とどこが違うかを、当時の教授達は学生に繰り返し力説したという。

旧制高校的教養教育を部分的にはあるが継承したその一般教育が、何故つねに問題を提起し続けてきて、今回の設置基準の改正に至ったのか。これについては、当然の結果との感想を抱くが、今となつては私の出る幕でもない。ただ気になることが一つある。本学における今回のカリキュラム改定に際し、視野の広い薬剤師の養成に大きくかわる人文・社

会系の開講科目を削減しなかったのは一つの見識であるが、その開講形態はこれまでと大差ないように見受けられる。どうしたら、〃これまで以上に教養ある薬剤師の養成〃を果たせるのか。数学、物理学を含め非専門科目を目を輝かして学ばせる何か名案があるのか等々の思いが湧いてくる。もし、自分であつたらこうしてみたいと胸を弾ませてはみても、今となつてはもう、残つておられる先生方に期待するだけである。

最後になるが、このような私見を述べる機会を与えて下さり、また、私のような存在をこれまで黙って見て下さつた先生方に心から御礼申し上げる次第である。